



ケニアの国会議事堂

2002年1月、憧れ続けたアフリカに生まれて初めて降り立った。その感動を今も忘れることが出来ない。突き刺すような太陽の光と、暖かい風。遠くから聞こえるアフリカの音楽。人々の笑い声。スーツケース1つの小さな私は、大きなアフリカに「ようこそ」といわれたような気がしていた。迎えの人の声でようやく現実に戻った。

今、アフリカを知って4年。私にとって遠かったアフリカは、ご近所さんになった。そんなアフリカでの体験を少しお話できたらと思う。

「どうしてアフリカに興味があるのですか」と聞かれることがある。人が好き、文化が好き、動物が好き、いろいろあるがどれも違っている気がする。好きだけでは留まらない魅力があるように思う。だから、私は「アフリカには問題がたくさんあるから」と答えるようにしている。マスコミが言う様に、戦争、貧困、エイズ、難民と問題が山積だ。学生の頃から、アフリカの問題とくに経済問題を解決するエコノミストになりたいと思っていた。そのためにイギリスへ発展途上国の問題を勉強しに留学もした。貧困問題がなくなる限り、人々は不幸のままだと考えたからだ。当時の私は、アフリカ人は全員貧困で、または難民かエイズで、幸せな人は少ないのではないかと考えていた。

金融の世界で働きながら、JICAでアルバイトをしたり、NGOでボランティアをしながらアフリカでエコノミストとして働く日を夢に見ていた。転機は社会人になってから2年後にやってきた。ボランティアをしていたNGOのケニアの孤児院で3ヶ月ボランティアをするという話だ。将来はアフ

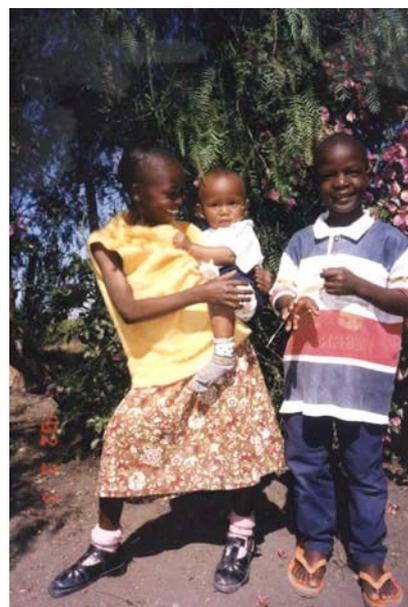


孤児院の子供たちとの往復6時間のハイキング

リカでエコノミストになる足がかりになればと、期待しながら。

「アフリカの子供たち」

スワヒリ語と英語のほかにそれぞれの部族語を話す。その笑顔はひまわりが夏空の下、パッと咲いたような素敵な笑顔だ。いつもニコニコ



働いていた孤児院の子どもたち

している。しかし、その生い立ちや現状を知ることになって、私はその笑顔がにせものではないかと考えるようになった。家族に育てられることなく、ほかの子供や寮母さんや私のような外国人に囲まれて大きくなる子供たち。そういう子供たちの数は、ケニア国内だけでも相当数だ。もちろん日本にも、世界中のどこでもいるだろう。ただ、アフリカではその原因が貧困やエイズ、戦争であることが多い。そして小さい頃から子供は、よく働く。自分のことは自分です。誰もしてくれないからだ。してくれるものとは最初から思っていない。料理も洗濯も学校の用意も、みんな一人でやる。小学生も高学年になると、自分より小さな子の面倒をみている。子供が子供の世話をしている光景を私は何度も目にした。

「強いなあ」ケニアの子供に対する私の印象だ。「かわいい」という印象はあまりない。ちょうど、

サバンナに生きる野生動物のイメージだ。

ボランティアの私の仕事は、NGOが実施している地域貧困層に対する社会サービスの実施を手伝うことだ。午前中は、低料金で実施している保育園の子供たちの勉強を見たり、遊んだり。午後は、縫製教室の生徒と話したり。土曜日には、地域小学生への補習授業と給食サービスの実施。英語や数学をつたないスワヒリ語で教える。

エイズセミナーを実施することもあった。会計を担当させてもらったりもした。しかし、私がそこで3ヶ月の間できたことはすごく小さいことだ。迷惑をかけていたことの方が多かったかもしれない。「エコノミストになって、アフリカの人役に立ちたい」と思っていた私は自分の進むべき道が分からなくなっていた。このアフリカには問題がありすぎて、解決することはできないのではないかと。しかし、それ以上にアフリカの人たちは毎日幸せそうで自分なんて用はないのではないかと。

「不幸な人」

私は、ケニアで自分は不幸だと嘆く人を見たことがない。もちろん、毎日彼らの日々降りかかる問題を聞いていてもだ。仕事が見つからない。エイズかもしれない。子供を学校にやれない。病院にいくお金がない。食べるものが買えない。家が火事で寝るところがない。貧困からくる問題だらけだ。聞いているほうもつらくなる。お金さえあれば。お金を稼ぐ手段があれば、と思う。

よくアフリカの人のはのんびり屋が多く働かないから、経済が発展しないとされることがある。しかし、歴史を少し考えてみると、アフリカの多くは植民地を経験している。政治的には独立したけれども、経済的にはまだまだ植民地主義を残しているのが実情だ。ケニアも独立して50年と経たない。経済発展はまだ途上だ。そしてゼロからのスタートではない。



キクヨ族のお母さんと子どもたち

マイナスからのスタートなのだ。私は、そんな国情をみているとケニアの人はよくやっている、そんな中でも頑張ろうとしている姿勢に胸を打たれる。また、ケニアには自殺する人がいないと聞いた。

彼らの表情には、明日を信じるアフリカのパワーを感じる。子供の笑顔もにせものではないと今では思う。日々を感謝して、生きていることを楽しんでいる時の表情なのだ。

NGOを去ってからも、2年あまりケニアで過ごした。今では、エコノミストとなってアフリカで活躍しようとは考えていない。それよりはケニアで雇用を生み出せるような、貧困層の人々が収入を得ることができるような活動をしたいと思っている。

縁あってケニア人の夫と出会い、共に帰国することになった。3年前、2人で「アフリカン・コネクション」というもっとアフリカを知ってもらおうという趣旨の団体を作った。スワヒリ語教室の運営や紅茶のフェアトレード活動、ケニア料理を味わってもらおうとさまざまな国際交流フェスティバルへの出店、小・中学校の異文化交流の授業への参加等の活動をしている。私たちが広げる小さな輪が、少しずつ広がることで、アフリカに対する偏見や無知を超えて相互理解への足がかりになればと願いつつ。そして、ケニア人の夫はいつも言う。

「貧困は苦しみだ。しかし、不幸ではない」と。